

廣益國產考

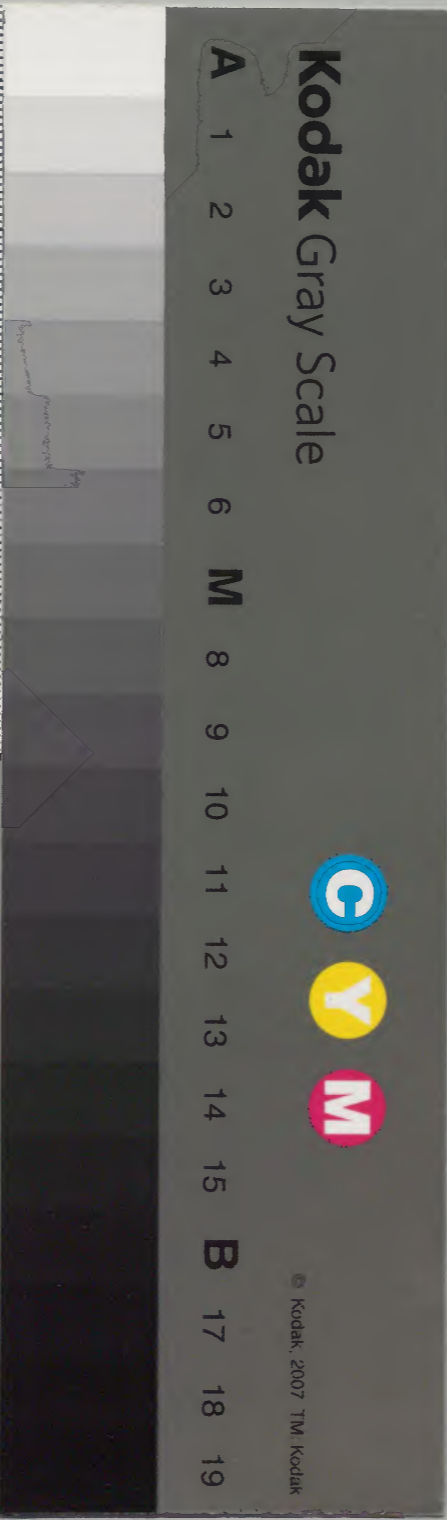
五

農務省
圖書
第七五七號
第八冊

太政官文庫
和書門
一〇九六〇
八冊架函號

庫架	八三函	二架	八冊
內閣文庫	番號	和 10960	
	冊數	8 (5)	
	函號	183	34

陸產



國產考卷之五

總論

大藏庫

大藏永常撰

明治十年購求

前編小國產の事述すといふも思ふ所を人々を以て
多岐に及ぶ法を以て見及びやむべからざるを以て
あつたるを已めて實小予が巻の拙れと秘を以て之を採
産の起えと考ふべし昔の農人又穀斗を以て以て
其飢饉の禍ひありあむ秋のありりひ不足しと饑
をんる成るるを以て以て人百穀を以て以て百穀を以て

清印

國產考

卷五

杜氏の上よと抱くは使さるる名物の油油物なる
のちぐらや我々の油油物なるを油油物なる
ハオ一石の油も云々

てつらう一石の油を白油とて焼くを油油物
あげて一通火を入る火とて油油物
たぎりし油にて焼物を入るを油油物
て又一つん石の油と火と入る油油物
又焼物なる油

水油

水油なるは
あがりとる

諸國の油の成見すするに菜種子の能く油
ぬる田地有るがら油の成見すするに油油物なる
田小をとりて金まを乾し菜種子を油油物なる
して油の油と買入る其油の成見すするに油油物なる
ア一菜種子と油とを油油物なるに油油物なる
及ぶすこれども予が若し油油物なるに油油物なる
油油物の油と油とを油油物なるに油油物なる



田と乾く
 菜種の蒔と
 樹の芽と



上方流
 油と搾る
 号

大坂のしんは丹
蠟燭屋
の事



どもいふと志しに後世に知らせむるのめりて着るさ
 て辨れども今一日もわけて叶ひぬるめりて成る
 好ふ其と向うりほを格ありてまよ製しなりのそり右
 蓄能と水神のり云やう是非をて叶ひに修飾のそら
 ざりめりさむしバ頻るそりほを格ありてまよの格をさ
 とたふれ不毛の地ふ格をい利分と具をせむひさばあつ
 農家少く格を秋さるるて格を困乏の用とせむ
 ちりてさむしはさむしと斗をがじし○お角のりせられさむ

是れ大実の招きとてつる接合と申す所も云通る畧也
 同後篇續篇は二部と申す接合とて植木とて植木とて
 實の木のまゝこれおきていほく大実を撰び居りしは雄木
 ありて成すの所ちよん接合あり接木ありて植木を一か
 も実のちよんづるおれく生すもよく實もよ中く生す年
 月よりいまもわ人又二十年目より接合して生實をみり
 ぬるべし

田のあがふ所
 育つ大実と云ふ

相或國がて村里と申す人ふ對しけ地も毛の所も葉附と植
 候もあらんややをいへん人曰ふ所はあつた一尺も毛を
 地をうとつていへん人といふ成りてやなびけりふ地を
 見るとつるまはれ人おるまはれ編じたりとも葉附ののり
 とあひてはと因て去りたりとつるまはれ葉附ののり
 葉附とて育ちまはれ上の土地とてなびけりとも金す
 あり大秋の地も西國中も葉肉をいへり皆お意ののり
 ありて一處の利とてぬる毛の地よりなれども昔のころ

多此方紀人あらむいづし又村里の長らるる人の記りの
 村小植もいへる振動の十ヶ九は試きておむいざり
 不考一思案するに今論され振ひさびらうふも智を
 ののこあらねんうとのなき此やふあらうとす多あり
 俗て産物る事ハ地よりお角思ひませらうとて
 ともはあふく押ゆらうの振ふるぞか一ねせらる一
 統田の時豆とて田の時小大豆と名て一年お肉めて用
 味香大豆とてうまけきなりけりてい書てよと價とあ

農家あり種にけあめてい出て田の時小大豆一粒もゆ
 るゆ一子をあく播るの内熟をさる農人は昔らうて地付
 らるゆにおまらうとてゆり種一とすむ色どもけち地あてん
 こそゆとてうく若て用うるゆりそゆなすて種田一
 あくさる田と乾くして麦業種とゆらう人又土性赤土
 めて小石の交うゆらぬ煉別な治の地相ふかりうるゆり
 一室一室麻葉と昔らうる遠い味ひ種別もづれうらあど
 うくすゆらうとてうまけきなりけりてい書てよと價とあ

一畝に一株づつを植
 たるものは種方種と
 適するものならんとして
 害するものば先を細
 一枚して或百畝あるを
 亦して百畝あり是も一
 畝小大種をわづねて
 之百畝あるを是と代



料小種をば之を又死と云くも亦百文なりとも
 亦して百畝あり是も一畝小大種をわづねて
 之百畝あるを是と代

薯粉

薯粉は、薯蕷の根を乾燥して粉にしたものである。

下品なる建書石より小石一日三人堀あてき度る程
 だけの出産物の内より又カンニイといふもの物く是ハ
 飯の上ふ置焚合すれば程のたふ成り好く一日三人堀あ
 てまゝ
 子あて米二合位の助中々高がぐ一山あて好積あ
 るらたすけ
 此位の助ふ成りの好くぐ一山置粉斗と物あ一置書又灰
 置とてその間の石を掘あす物あて賣あ一日の働賃銀一両又
 ほどよふ高のその方り極山家のもの好の置と廠と堀と鉄
 石より積あてハ産あ成りく是ハ山より全治と堀あは小

おれ一 年々九別より大坂へ出た石より置粉二斗合て
 石方係といふる負かろぐ一と方より置粉二斗合て
 いけりふ一石も堀るとせは堀を別掛川より全合直
 して置粉二斗合と六月の月め小利といふ物とて考とす一石と置
 物せり是と掛川の産物置粉と種一置粉一置粉地置合別地
 堀ふ一置粉置あすり物ととも根と堀置粉と置あすり
 大中より大石も置あすり石置の山中小石置あすり置あ
 堀あすり置あすり置あすり置あすり置あすり置あすり置あ

高杉と
製法
する由



肌體の竹帆と脚の才一の物さきども
 堀別ざるあふくち
 容易く堀を製するも
 厚くせ居と致し
 差てんぬのるれは
 山家のもれは
 堀方製し
 新しむぬまば
 厚くせ居と致し
 差てんぬのるれは
 山家のもれは
 堀方製し
 新しむぬまば

錦

法は一統
 唐ふくも
 一統
 唐ふくも

綿の全木



規則として作るあり、得るものなり、一年二年
 作りて利益を得るものと捨てるものあり、世に
 多く作るも得るものなり、中へ小作をせざるもの
 多く力を入れて作るべし、後ふたつは不利と作るものあり
 是と作るものあり、國へ地をより買つて作るものあり、
 用ふるものあり、作るものあり、○根張を作るものあり、
 本張りを作るものと織て自前の用を作るものあり、
 地へ養分をいれ、とせざるものあり、養分をいれ、とせざるものあり、

大坂
木綿問屋
の図



小も撰多るるも其地活る地活る地少級地地白形地
 杯と多て國産村と入る者物の川乃水割の東ふある
 渡川堤よ活る村きう活るこくこくこくこくこくこく
 晒てまゝに緝るへ海一又の海とくくゆあふき一後
 とくくと緝るへき一深させるやするもれ中敷とは入
 て徳玉へ送るるもさうびがま日本國中津浦まで
 以在るうらまえのち強中國勉ふうらたふ云云く大坂
 同産しうあきと出くて入仕入るへ貴あのみ反敷

昔年より極りあつて徳玉備中の水産を以て
 へる千反の産るる反と貴き一来りし石天保は
 より中國辺國辺の木産と男とる者出来て多く買
 と同産し出るる産不買も一積りひる其地はきりきり
 より大坂へ出あつてたのぞく徳玉へ送る人さおのお産
 たくさる有徳方へと出く産産ふからるは買さるるれが
 仕入産少くつらつ仕入の木の園とわくは徳玉の産
 送るるも出来さうらたの産るる産くても畑さすくえさ

夫古者天子之於民也猶天之於地也
不可一日無之也故天子必先慎乎
民而後慎乎土也天子之於民也猶
天之於地也不可一日無之也故天
子必先慎乎民而後慎乎土也

養蚕

夫古者天子之於民也猶天之於地也
不可一日無之也故天子必先慎乎
民而後慎乎土也天子之於民也猶
天之於地也不可一日無之也故天
子必先慎乎民而後慎乎土也

いんども昔ひえされれば只中りあざうやふてぞる
くろん脱は今年七十七の歳とあつて安居のあひ
またふあつて老妻しぬまがせんぞあす一物も
吾が昔あつたうらまはれ國置たるんる代置ふのうらま
くね先妻の養ひのま置たるん素と植る斗ふあ一地と養
と斗ふまも山あふくハ山の裾採ふ素と植るを後
思地はあるとれり又打穿れくる村屋中ら川堤等
あゆめりあつてあつて此地の堤のあ腹小植ぬまは成長も

よく根をびらきとてハ洗せん
 水のさられつよみとてハ又また
 又香をとせしへつあひびい
 こづろまき月末の家家
 の肉ふてかほ日敷ひしきよき
 乃金銀と焼やきゆされば
 殊ことの大益とゆふん是小
 ままろのれ有あるべし



養やしふふ回かい

楮こ びみぞ

楮こハ知ちの場ば山さん知ち杯はいの片ぺううのあへゆつて土つち留りとさるれ
 あく年とし楮こかゆりゆはらうばそ成なり株かぶよう芽めとせし
 秋あきよあつて成せい長ちやう一いつ麦むぎ倉くらはく菓かりてらるあけく
 為なりゆされば捨す別べつ物ぶつつもの志し守まもりさるびくとそふ
 成せいりのくぬふ辺への山さん添そ乃の村むらを田でん加かめ十じゆるも持もちたる
 百姓ひやくしやうきてハ楮この皮かわの乾かわあけらると百ひやく把ば後ごハぬれさる
 一いつ把ばとてハ楮この價あひ扱あめふととてハ箱はこをて買かひ百ひやく日にち

平地の村あり細の田植て利とゆふもねは橋上程
多くわつて種者わつ苗の種とると撰ぶ種と

○堵之種類

は種れ九引て種るものなり
むねふよとてわらう

一 白くま上

本丸赤きく皮をのり
切目黒ひとより種く本丸
極白く又赤き皮をのり種く

一 九葉 中

本丸赤きく皮をのり
上紙ふき
わらうとふも種小海と

一 白の尾

本丸白く脂をのり九斤
わらうとふも種く

一 月 下

丸をのりつとより
皮をのりつとより切目
まう半

一 黒尾と 下

本丸白く皮をのり
わらうとふも種く
すれ也

一 白尾と 下

本丸白く脂をのり
まう半

一 青尾と

是より堪州木部にて仕立九川中を以て
迎下送る所の程なり

一赤楮

木肌赤く赤を印く多しなり切りしき
皮もろし

一黒楮

木肌黒くちふ小切し多しなり切りしき
西條寄し至地も楮とす

一白楮

石州 赤くちきり用たり
一 赤くちきり用たり

一白楮

紙の性質より切られども木肌赤く切りしき
たよりしきと名おされがら楮とて若とす
らみふおとらひ

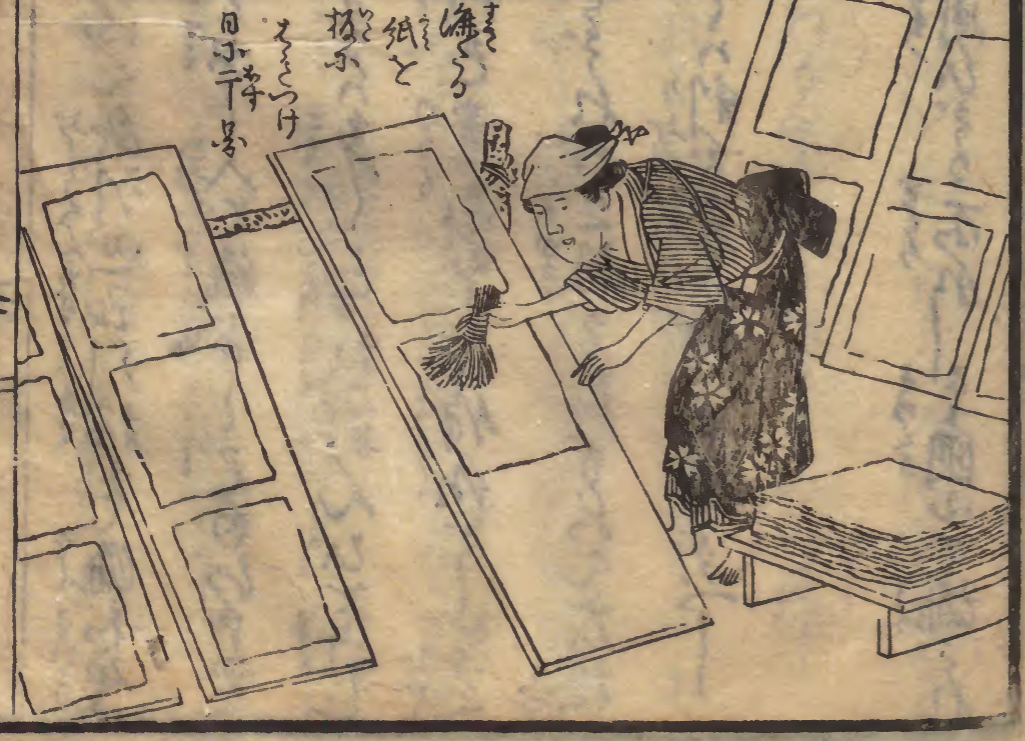
以外の程なり

餘の白くちきり楮小海交る所ありて
葉を細うけしきみおて楮小交て海とす
うらり又白くちきり艾と交て海とす
のまけ伸くちきり葉をせんときりしき
楮とす入海たるはりしき
ぬまぐ木の皮楮ふり葉小海交る所ありて
中井おより白付のちきりしき

中井おより白付のちきりしき

此と抽く余紙を介して幣に滌りて流るる本
 余り大木とさるるゆゑ一宗種て之は平日不伐
 枯伐せしむる桶の蓋を動かしてし皮をむき搥白紙
 干上蓋を不滌して皮をむきけりて紙の盤
 のよふてたし紙を滌りて枯の紙を滌かすもわらふ
 るゆゑ○は苗のより甚ふけり候もつらなる成
 め月小室の懸せし竹を干揚せしむるがゆゑ葉を
 ぬきと終りて馬引紙とほらるるや紙をむき十月

此のまゝ尺を寸五分伸
 るがふ種もむかひの目
 大木火吹作らるる小
 子の指がらふ伸たる成
 右ふちやく伐りてさ
 有紙を滌りてさるる紙
 ぬきと終りて幣に滌り



國産考
 卷五
 廿九

農家にて他方へ海産を利をばらめたりはし百姓も
 作らしてくると生福と刈米の如く年貢を納め麦を
 為仕をぬき不れく麦の肥培をすする年貢をばら
 すしめくを所より紙と海産をばら二月ごろ
 までの内打寄海産といはれし生を家のま一日の
 備貸部百文といはれり女房の紙と海産百文十文祖母
 の紙と板ふらと付板すれは八十文十二文の男子女子
 一人部十文後ふあらうぐ合て四百をばら又是支後が

紙海産の依り別不利をばら方よりばらり物とよふ
 て括ふ量の五くもやあひ入人々を産むて海産ら
 てもも利産の八くもさくはら海産少くはら
 ようの量あらせらひ女中と物若く教く好く産め
 ともありをばらるも取ぐ一予けるの産く著述の
 うちの記し物ゆき紙と海産の村也ふら山部の海産
 海産はらるるあきくは括とくくは氷小産一晒の
 あらざれが紙と海産のやう云はるとんきくはら

○大坂の紙官屋へ取のり高時結ぶと海物に帯は
肉ふ土別より出る紙にかぶく條のふくより出る帯
二ふちより一はまきのちひきうらうらとるまがこ
先申書の紙半少とも

- 山代木紙
- 徳地木紙
- 彦路木紙
- 熊毛木紙
- 阿武木紙
- 小川木紙
- 須石木紙
- 五ヶ村木紙
- 岩園木紙
- 同行折
- 吉賀木紙

- 石州木紙
 - 三好奉書
 - 三好木紙
 - 三ツ尾木紙
 - 通津木紙
 - 安産園紙
 - 中島松木紙
 - 信申毛紙
 - 雲別木紙
 - 鈴鹿川木紙
 - 廣徳毛紙
 - 廣徳木紙
 - 同瑞口
 - 同皆田
 - 同牛
 - 同奉書
 - 同大摺中摺
 - 同若木紙
- 右圖の紙結糸あまごも略して記して申國斗り紙
ありし紙しよちのていふと紙とて土佐の由より

